

ふるさとの縁日

太々神楽も楽しく

にぎわった片貝の虚空蔵様

○...ピーヒヨロ、ピーヒヨロ、
ピーヒヨロ...晴れ上った冬空
に、太々神樂のお囃子がひびく。
一月十三日、片貝の虚空蔵様は、
終日引きも切らない参詣人で大賑
い。腰のまがった老夫婦、自転車
で来た子どもたち、マイカーでか
けつけた家族連れ、そして他へ嫁
に行った娘さんが子どもを連れて
新年の里帰りのついでになど、こ
としの参詣人は一万人をこえたと
いう。

○...遠く元禄年間から続いてい
るというこの祭、十三年目ごとの
ことだ。

寅年にひときわ賑やかに御開帳さ
れてきているが、こどもは二十九
回目の寅年にあたり、昨年市の無
形文化財に指定された「片貝太々
神樂」も一段と熱を入れて披露
され、参詣の人たちの眼を楽しま
せてくれる。

○...本尊前の石炉で、護摩をた
いて、からだに線香の煙をかけて
無病を祈る人たち。一千数軒も軒
を並べた出店でアメやオモチャを
買う子どもたち。ふるさとに残る
祭や縁日が、しだいに失われてい
く傾向のなかで、今も大賑いの虚

空像様の祭礼は、訪れる人たち
にとってことのほかに楽しく楽し
いのだろう。参詣の亀泉町大河原
牛蔵さん（七十四歳）は「毎年楽し
みにして来ています。境内の池に
ウナギを放すと、身代わりになつ
て病気にならないといわれています。
そのお蔵か、今もこんなに元
氣です。来年も来ますよ——」と
語ってくれる。太いケヤキの大木
にかこまれた虚空蔵様の杜は、こ
の日、楽しげいっぱいだった。

（写真は賑わう虚空蔵様で）



季節のメモ



◆「月」。冬のおわりのこの月
を「きさらぎ（如月）」といいます。
衣をさらに着る：という意味
から、衣更着がそのまま呼び名に
なったといわれますが、一説には
春二月は気候の変わりめなので陽
気をさらに迎えることから「氣更
に來たる」と呼び名ができたとも
伝えられます。◆また、この季節
の変りめを「節分」といいます。
節分というのは季節の変わりめの
ことで、むかしは春夏秋冬ごとに
この日を祝いましたが、寒三十日
が終って、冬から春にはいる、立
春の前日は一年の終りにも当る
というので、とくに重んじられた
ものです。もとは中国の邪氣はら
いの行事で、わが国には室町時代
に伝えられたようです。冬の節か
ら春の節に移る分岐点で、地方に
よってはセツガワリといっている
ようですが、この方が古いことば
でしょう。◆節分の夜に「福は
内、鬼は外」と唱えながら豆をま
くのは、鬼やらいとい、つまり
悪魔を追い払うためにする行事で
す。節分も一種の年越しであった
ので、その豆を「年の豆」とか
「鬼打豆」と呼んだり、その行事
を行なう人を「年男」と呼んでい
ます。◆しかし「追儺（ついな）」
は、平安朝のころは宮中で除夜
(大晦日)に行なわれていました
ので、一般もこれにならっていた
ようですが、これは年を一つ増す
ための行事として、もとはやはり
多くの豆を食べる風習は、かなり広
い地域にわたって行なわれている
ようですが、これは年を一つ増す
ための行事として、もとはやはり
大みそかに行なわれていた証拠で
す。◆この夜、市内の社寺でも年
男といわれる人たちが景気よく豆
をまきますが、ご家庭でも、この
ごろは、この古風な行事を復活し
てやっている風景をみかけます。
ホウロクでいった大豆をマスに入
れて目をつぶって自分の年より一
つだけ多く握れたら、ことしは運
がいいとか、案外おもしろい遊び
にもなっているようです。



増えている火災

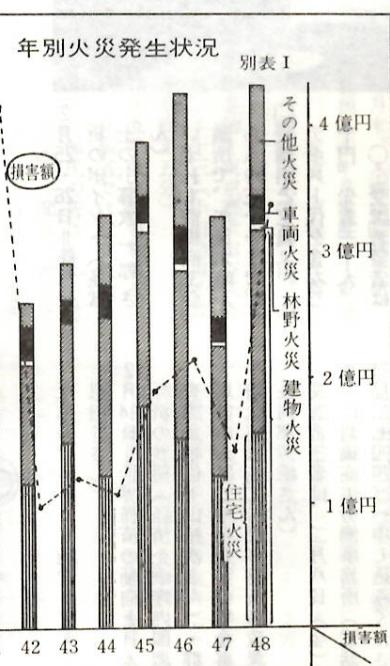
3億3,000万円が灰

消防はじまって以来の最高
213件



市消防本部では、このほど、昭和四八年中の「前橋の火災の実態」をまとめました。四八年は国内で石油化学工場の連続爆発事故、デパート大惨事と、ショッピングな火災事故が多発、多くの犠牲者を出しました。本市では、こうした大惨事につながるような事故はなかったものの、火災発生件数では消防開設以来最高の二百十三件をかぞえ、重傷者二十六人、被害額も三億三千万円にのぼっています。こうした火災の原因も、もとはちょっととした不注意からが多く、みなさんの細心の注意が望られます。

火災の原因をみると、いろいろな要素があるが、何といつても一瞬の不注意が多い。貴重な財産を一瞬に失って、果然としている……こうなってしまってからでは、もう遅い。



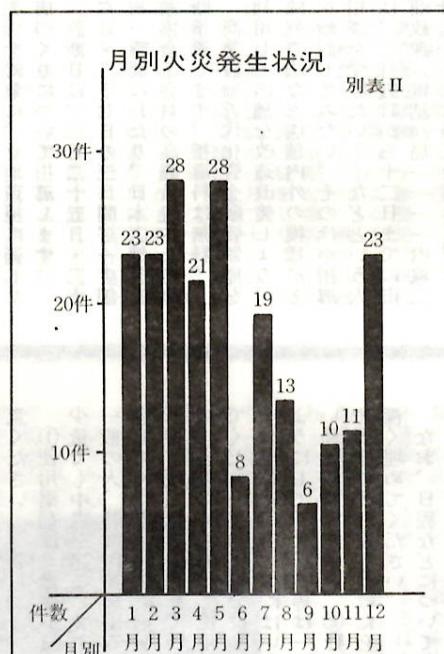
火災を大別すると、建物火災、林野火災、車両火災、その他の火災と四つに分けられます。このうち、住宅での火災は、建物火災のうち約半分を占めるほど比率が高く、焼死者も最も多いことから、悲惨な火災といわれています。

最近では、こうした住宅火災は少しずつ減る傾向にあるものの、まだまだ多く、老人や子どもの死者もあとを断たないところから、いつそうの注意が望まれます。

いっぽう、住宅火災以外の建物火災では、木工所や製材所などの木工関係の火件が十五件も起つていて、大きな被害を出していま

また、十一月下旬から異常乾燥

火災の多いのは
3月・5月・12月



火災は十一月から翌年の五月ごろまでが最も多く、この期間は乾燥が続き、その上、火を使う機会が多いためで、ことしも、これからが火災シーズンともいえるわけです。その上、強風におおられるなど、大火になる危険が強いわけです。

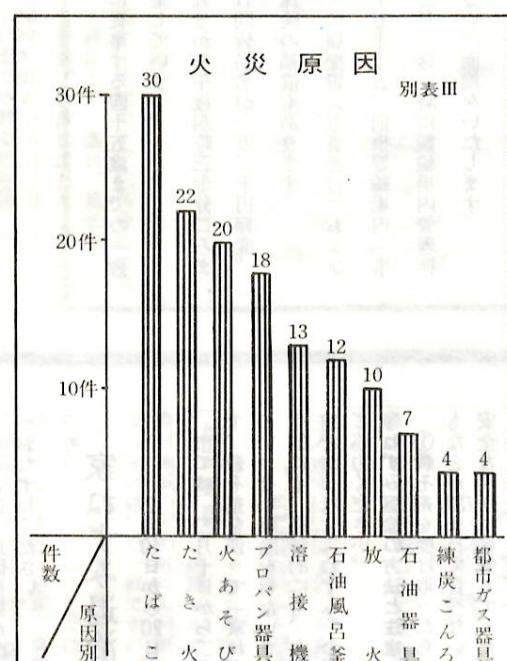
一日ごとに九十万円の損失

まだ多い 住宅火災

火災を大別すると、建物火災、林野火災、車両火災、その他の火災と四つに分けられます。このうち、住宅での火災は、建物火災のうち約半分を占めるほど比率が高く、焼死者も最も多いことから、悲惨な火災といわれています。

最近では、こうした住宅火災は少しずつ減る傾向にあるものの、まだまだ多く、老人や子どもの死者もあとを断たないところから、いつそうの注意が望まれます。

いっぽう、住宅火災以外の建物火災では、木工所や製材所などの木工関係の火件が十五件も起つていて、大きな被害を出していま



火災の通報は一刻も早く

局番なし119番へ

万一、火災になった場合は、一刻も早く一一九番への通報がたいせつです。

二百十三件の火災のうち、百五十二件が一一九番へ通報され、他の六十一件は一一〇番や普通電話からの通報でした。一刻も早い通報は、局番なしの一一九番で、火灾の最も重要な初期の時間を短縮し、被害を最少限にとどめるようになります。マッチの管理が望まされます。

火災は十一月から翌年の五月ごろまでが最も多く、この期間は乾燥が続き、その上、火を使う機会が多いためで、ことしも、これからが火災シーズンともいえるわけです。その上、強風におおられるなど、大火になる危険が強いわけです。

一千円をこえる被害を出した火災は六件、十万円以下の損害で消しとめた、いわゆるボヤは百四十五件のぼり、発見の早さ、初期消火の徹底がいかに重要かおわかりのことでしょう。

初期消火に使った器具では、水

バケツ(百件)消火器(五十四件)毛布・布団(九件)消火栓(五件)使用せず(四十五件)となっています。毎日九十万円が灰になって来ているのが最近の傾向です。これらの被害額を一日当たりにして、水バケツ、消火器が大半を占め、消火器の使用が日立って増えていることになり、火災一件当たりでは百六十万円の損害額となっています。

また、市内百九十六の町のうち約半分の町は「無火災」でしたが、総社町総社(十件)天川大島町(九件)上泉町(八件)千代田町四丁目(六件)鳥羽町(六件)の順で火災が起っています。

